

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』

角 田 泰 隆

道元禪師の『正法眼蔵』には、仮字で書かれた法語と真字で書かれた古則集（三百則）がある。どちらも『正法眼蔵と案題されているからには密接な関係があるに違いない。

本稿は、両者の関係を研究したこれまでの成果（鏡島元隆・河村孝道・石井修道氏らによる研究成果）を踏まえながら、仮字『正法眼蔵』（以下、仮字と略す）と真字『正法眼蔵』（以下、真字と略す）に共通する古則を総て取り上げ、両者の関係を探ったものである。あくまでも仮字を中心に、その出典群の中に真字をも含めて考察してみた。

本稿においては、全く合致するもの、或いはそれに準ずるものを出典第一類とし、それ以外のもので比較的相似するものを出典第二類とした。また、合致度がより高いものについて「より近い」とか「近い」という表現を用いた。

尚、その古則を略称で挙げ、巻目を（ ）に入れて示し、その頭に◎○△×の記号を付して、仮字（上段）と真字（下

段）の合致度を分別した。

◎……真字が出典と思われるもの、或いは真字がより近いもの。

○……真字が他の出典と同等の合致度をもっているもの。

△……不明であるもの。判断ができないもの。

×……他の灯史・語録が出典であるもの。仮字と真字の出典が明らかに異なるもの。

また、仮字の引用は大久保道舟編『道元禪師全集』上、『永平広録』は同書下により頁数のみを記した。真字の引用は『正法眼蔵菟書大成』巻一、（金沢文庫本）、或いは河村孝道著『正法眼蔵の成立史的研究』（真法寺本）により、巻数及び頁数を示した。

○風性常住（現成公案）

「現成公案」巻の麻谷宝徹の風性常住の話（和文、一〇頁）および真字（中二三則）の出典第一類は『宗門統要集』巻三

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

(二二A、以下、『統要集』と記す)である。仮字は、真字或いは『統要集』から引用したものであると思われる。

◎一切衆生有仏性（仏性）

杭州塩官県齊安国師は、馬祖下の尊宿なり。ちなみに衆にしめしてはいはく、一切衆生有仏性。
(前略) 因塩官或示衆云、一切衆生有仏性。(以下、略)
真字『正法眼蔵』中一五

(二七頁)

金沢文庫本

仮字のこの引用文はあまりに短文であり、出典を特定できないが、あえて言えば真字が最も近い。真字の出典の第一類は、右に同じく『統要集』と『聯灯会要』であるが、『統要集』は「示衆」が「示徒」となっており、『聯灯会要』は「因」の字を欠いているので、厳密に言えば真字が最も近いということになる。

◎一切衆生無仏性（仏性）

大滬山大円禅師、あるとき衆にしめしてはいはく、一切衆生無仏性。
大滬嘗示衆云、一切衆生無仏性。(以下、略)
真字『正法眼蔵』中一五

(二七頁)

金沢文庫本

これも出典を特定できない。真字の出典の第一類は『統要集』巻四(三五A)『聯灯会要』巻七(Z一三六・二七二C、D)であるが、微細なところまであえて言えば『統要集』は「師

嘗示衆云、『聯灯会要』は「示衆云」となっており、「大滬」の語を有つ点で、真字がより近いとも言える。

○狗子仏性（仏性）

「仏性」巻の「狗子仏性」の話(三二〇三三頁)は八分して和文化され、それぞれについて拈提するかたちをとっており、まとまったかたちでの引用文ではない。また、そのためか、趙州が「有」と答える問答と「無」と答える問答が、前後逆になっている点で、出典とされる語録群と異なっている。

この点を無視すれば、仮字の出典第一類は、真字(中一四則)および『宏智録』「頌古」(T四八・二〇A、以下、『宏智頌古』と記す)であり、二者はほぼ合致している。

○兩断蚯蚓（仏性）

長沙景岑和尚の会に、竺尚書と
ふ、蚯蚓斬為兩断、兩頭俱動、未審、仏性在阿那箇頭。師云、莫妄想。書云、争奈動何。師云、只是風火未散。(三三三頁)
長沙景岑禅師、因竺尚書問、蚯蚓斬為兩断、兩頭俱動、未審、仏性在阿那箇頭。師曰、莫妄想、書曰、争奈動何。師曰、会即風火未散。(後略)

真字『正法眼蔵』上二〇

真法寺本

仮字の引用文の末尾の「只是風火未散」の「只是」である

が、このようにするのは仮字のみで、真字および『永平広録』卷九「頌古」(一八〇頁、以下、頌古と記す)は「会即」(真字の出典第一類である『統要集』卷四へ一七B)、第二類である『聯灯会要』卷六へZ一三六・二六九C、Dも同じ)とし、『永平広録』卷四(三二八上堂)・卷七(五〇九上堂)では「只為」としている。仮字のように「只是」とする出典かほかにあるかも知れないが、それが見出されない現時点では、仮字は真字および『統要集』と最も合致していることから、これらから引用したものと考えるのが妥当であろう。

△妙淨明心(即心是仏)

古徳云、作麼生是妙淨明心、山大瀧問仰山、妙淨明心、汝作麼河大地、日月星辰。(四四頁)

大瀧問仰山、妙淨明心、汝作麼生会。仰云、山河大地、日月星辰。師云、汝祇得其事。仰云、和尚適来問什麼。師云、妙淨明心。仰云、呼作事得麼。師云、如是、如是。

真字『正法眼蔵』中六八

金沢文庫本

仮字のこの説示は、おそらく道元禪師が記憶に基づいて述べられたものであろう。「作麼生是妙淨明心」という語は未だ語録等の中に見あたらない。この古則を見出すことのできる『統要集』卷四(三一B)『聯灯会要』卷七(Z一三六・二七

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』(角田)

二C)『禅門拈頌集』卷一〇(高麗蔵四六・一六二B、以下、高麗蔵をKと記す)等のみならず「妙淨明心、汝作麼生」となっている。

△火焰説法(行仏威儀)

雪峯山真覚大師、示衆云、三世諸仏、在火焰裏、轉大法輪。玄沙院宗一大師云、火焰為三世諸仏説法、三世諸仏立地聽。

圓悟禪師云、將謂猴白、更有猴黒。互換投機、神出鬼没。烈焰互天仏説法、互天烈焰説法。

風前剪断葛藤窠、一言勘破維摩詰。(五三、五四頁)

真字『正法眼蔵』下八七
真法寺本

仮字では、雪峯と玄沙と圓悟の語を並べて挙げて拈提している。このように三者の語が並べられて示されているのは『圓悟録』卷一九の頌古(T四七・八〇二B、C)であり、『圓悟録』が出典の第一類として挙げられる。尚、玄沙の語が雲門の語として示されているもの(『聯灯会要』卷二二、『禅門拈頌集』卷二〇)もある。

真字は圓悟の語を欠いているので、真字が仮字の出典となつたとは考えられないが、共通する部分においては合致している。

○一顆明珠（一顆明珠）

「一顆明珠」巻の玄沙の一顆明珠の話（六〇～六一頁）、及び真字（上一五則）の出典第一類は『景德伝燈録』巻一八（T五一・三四六C）、以下、『伝燈録』と記す）である。仮字は『伝燈録』或いは真字から引用したものと考えられる。

◎大庾嶺頭（古仏心）

疎山いはく、大庾嶺頭有古仏、
放射射到此間。（前略）大庾嶺有古仏、放射射
放射射到此間。（七九頁）
到此間。（後略）

真字『正法眼蔵』上九七
真法寺本

真字の出典第一類は、『聯灯会要』巻二二（Z一三六・四〇一D～四〇二A）、大慧『正法眼蔵』巻四（Z一一八・四五C～D、以下、『大慧正法眼蔵』と記す）である。仮字では「疎山いはく、大庾嶺頭有古仏、放射射到此間」と引用されているが、「大庾嶺頭」としているのは真字（永昌院本・成高寺本）のみ（真法寺本は「大庾嶺」であり、『聯灯会要』も『大慧正法眼蔵』も、この部分は「大嶺」となっているので、仮字は真字からこの部分を引用したものと考えるのが妥当である。

○趙州古仏（古仏心）

「古仏心」巻には「雪峯いはく、趙州古仏」（七九頁）とあ

るのみで、あまりに短文であり、出典の特定はできない。真字（下八三則）の出典第一類は『圓悟録』巻一八「頌古」（T四七・七九九A）である。

○仰山悟即不無（大悟）

「大悟」巻の仰山悟即不無の話（八五頁）の出典第一類は、『宏智頌古』（T四八・二四A）である。真字（上七則）も頌古（一七六頁）もほぼ合致している。仮字は『宏智頌古』或いは真字から引用したものと考えられる。

◎磨甌作鏡（古鏡・坐禅箴）

南嶽と馬祖の磨甌作鏡の話は「坐禅箴」巻（九一～九六頁）および「古鏡」巻（同、一八七頁）に挙げられている。これらが真字（上八則）に基づくことは既に鏡島元隆・河村孝道両氏により指摘されている。「坐禅箴」巻には「江西大寂禪師、ちなみに南嶽大慧禪師に参学するに、密受心印よりこのかた、つねに坐禅す。……」とあり、「古鏡」巻には「江西馬祖、むかし南嶽に参学せしに、南嶽かつて心印を馬祖に密受せしむ。……」とあって、これは真字の「洪州江西馬祖大寂禪師へ嗣南嶽諱道一参侍南嶽、密受心印……」と相応する。このように記述する出典はいまだ見出されておらず、真字は道元禪師によって『伝燈録』巻五（T五一・二四〇C）等を改

変して引用されたものと考えられている。仮字がこの真字から引用したものであることは確実であろう。

◎曹山大海不宿死屍（海印三昧）

曹山元証大師、因僧問、承教有言、大海不宿死屍、如何是海。師曰、包含万師云、包含万有。僧云、為什麼不宿死屍。師云、絶氣者不著。僧曰、既是包含万有、為什麼絶絶氣者不著。師云、万有非其功絶氣。（一〇五頁）

真字『正法眼蔵』中九四
金沢文庫本

仮字と真字はほぼ合致しており、また密接な関係をもっている。これらの出典第一類は『伝灯録』卷一七（T五一・三三六B）であるが、『伝灯録』では「絶気」のあとに「有其徳」の語がある。出典第二類である『統要集』卷八（七B）『聯灯会要』卷二一（Z一三六・三九八B）『曹山録』上（T四七・五二八C）等も同様である。道元禪師は「海印三昧」卷のこの古則の拈提において「曹山の道すらく、万有非其功絶気。いはゆるは、……」と解説され、また「万有なる前程後程、その功あり、これ絶気にあらず」と示されているので、この部分を「万有、その功、絶気にあらず」と読まれていたのであろう。ゆえに真字も同様に「有其徳」の三文字を欠い

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

ていることは重要であり、真字が仮字の出典になっていたことを物語っている。この点はすでに鏡島元隆氏により指摘されている。

◎仏光明（光明）

「光明」卷に示されている唐憲宗皇帝と韓退之との因縁（二一七～二一八頁）は和文で示されている。真字（中七三則）の出典の第一類は『統要集』卷七（三三B）であり、ほぼ合致している。仮字がいずれから引用したものか確定はできないが、仮字の「いまのはこれ竜神衛護の光明なり」という部分において、金沢文庫本の「此是竜神衛護之光」（『統要集』も同じ、但し『統要集』には「此」の上に「相」の字がある。これは仮字では和語化されていない）の「此」の左に「イマノハ」と傍記してある。これが仮字の和語化に関連するものとすれば、仮字は真字からの引用と考えることができる（『辨道話』と真字〈中二二則〉の関係参照、後述）。

◎雲門光明（光明）

あるとき、上堂示衆云、人人尽有光明在、有光明在、看時不見暗昏昏、作
雲門示衆曰、人人尽有光明在、看時不見暗昏昏、作
摩生是諸人光明在。衆無對。自
在。衆無對。自代云、僧堂・仏
代云、僧堂・仏殿・厨庫・山門。
殿・厨庫・三門。又曰、好事不

（二一九頁）如無。

真字『正法眼蔵』上八一
真法寺本

同一の古則であるが、仮字と真字とでは異なっている。仮字の出典第一類は『園悟録』卷一九（T四七・八〇三A）と思われる（但し、「作麼生是諸人光明在」が「作麼生是光明」となっている点で相違）。真字には、末尾に「又曰、好事不如無」の語があり、これをもつ出典は「雪竇頌古」（八九則）『雲門広録』卷中（T四七・五六三中）『禅門拈頌集』卷二二（K四六・三八三B）等であるが、これらはいずれも「僧堂仏殿厨庫三門」ではなく、ただ「厨庫三門」としている点が大きな相違で、いづれも出典とはできない。もし、仮字が真字の「又曰、好事不如無」を切り捨てて引用したと考えられれば、仮字の出典は真字がその筆頭となる。

○南泉鬼神覩見（行持上）

「行持上」卷の「南泉いはく、老僧修行のちからなくして、鬼神に覩見せらる」（二三三頁）は、真字（上一八則）では「王老師修行無力、被鬼神覩見」となっており、頌古（一八〇頁）および、他の出典群（『統要集』、『聯灯会要』、『伝灯録』等）も同様である。仮字はこれらから引用したものであろうが、この程度の古則（それも一部分）は道元禅師の記憶裏にあった

はずである。ちなみに真字の出典の第一類は『統要集』卷三（七B～八A）である。

○説得一丈（行持上）

「行持上」卷の説得一丈の話（二三三頁）および真字（上七七則）の出典第一類は、『統要集』卷四（四二B）と『聯灯会要』卷七（Z二三六・二七五B）である。仮字は、真字或いは『統要集』、『聯灯会要』のいずれかから引用したものと考えられる。

△長慶往来（行持下）

「行持下」卷の長慶慧稜が雪峯と玄沙とを往来して参学した話（二五三頁）の出典は不明である。真字（中五六則）と頌古（二七二頁）は共通しており、頌古は真字から引用したものである。真字の出典第一類は『大慧正法眼蔵』卷四（Z一一八・四七A）である。ところで長慶が雪峯と玄沙のもとを往来した期間について、「行持」卷では「参学すること僅二十年なり」といい、「三十年の功夫むなしからず」と言っている。頌古は「三十年」とし真字も「三十年」（金沢文庫本の「二十年」として）。『大慧正法眼蔵』と『聯灯会要』卷二四（Z一三六・四一七A～B）は「二十年」、『伝灯録』卷一八（T五一・三四七C）は「二十九載」としている。「二十

九」という数字から言えば、仮字は『伝灯録』によつてゐるとも考えられる。

○風幡話（恁麼）

第三十三祖大鑑禪師、未剃髮のとき、広州法性寺に宿するに、

二僧ありて相論するに、一僧いはく、「幡の動するなり。」一僧

いはく、「風の動するなり。」かくのごとく相論往来して休歇せ

ざるに、六祖いはく、「風動にあらず、幡動にあらず、仁者心

動なり。」二僧ききて、すみやかに信受す。（一六五頁）

仮字の出典は不明であるが、第二類としては、『広灯録』

卷七（Z一三五・三三三C）『統要集』卷一（三八B）『聯

灯会要』卷二（Z二三六・二二二C）があげられる。仮字は和

文であるため、分かりやすく変えられているのかも知れない

し、ほかに出典があるのかも知れない。これらの出典の第二

類と真字と比べたとき、真字も同等の合致度を有し、いずれ

とも定め難い。

◎大悲菩薩（観音）

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

雲巖無住大師、問道吾山修一大師、大悲菩薩、用許多手眼作
麼。道吾曰、如人夜間背手模枕
子。雲巖曰、我会也、我会也。

道吾曰、汝作麼生会。雲巖曰、
遍身是手眼。道吾曰、道也太殺

道、祇道得八九成。雲巖曰、某
甲祇如此、師兄作麼生。道吾

曰、通身是手眼。（一六九頁）

真字『正法眼蔵』中五

金沢文庫本

仮字・真字ともに出典は不明である。問答の語句について

は『統要集』卷七（二三A）B）が最も近いが、問者と答者が

入れ替わっているので出典の第一類とはできない。

全体から見ても『宏智頌』「頌古」（石井本一〇二頁、以下『宏

智頌古』と記す）が最も近いと言えるが、『宏智頌古』では、

「夜間」が「夜中」（『統要集』も「夜中」、「雪竇頌古」は「夜

半」、「圓悟録』卷一八、△T四七・七九九B）は「夜間」となっ

ており、「我会也」を繰り返しておらず、また「八九成」を

「八成」（『統要集』のみ「八九成」となっている）としているの

でやはり出典の第一類とはできない。

その点、真字が仮字の引用文に最も近く、（但し、「某甲祇如

此」が無く、「道也」が道即になっている）、仮字の引用文は他の

語録・灯史ではなく、真字に基づいていると考えられる。

△見色明心(観音)

雲門に、見色明心、聞声悟道の
観音あり。(一七四頁)

雲門示衆曰、聞声悟道、見色明
心。作麼生是聞声悟道、見色明
心。挙手曰、観世音菩薩將錢來
買餠餅、放下手曰元來是饅頭。

真字『正法眼蔵』下五七

真法寺本

仮字では「見色明心、聞声悟道」としているが、真字をは
じめ、『圓悟録』『聯灯会要』『統要集』等の出典第二類では
「聞声悟道、見色明心」と逆になっている。いや、仮字が逆
に引用しているのである。真字の出典第一類は『圓悟録』卷
一九(T四七・八〇四C)であり、ほぼ一致している。仮字の
この部分は、おそらく道元禅師が記憶に基づいて、「観音」
卷の付記として記されたものである。何から引用したのか
は詮索するに及ばない。

○如鏡鑄像(古鏡)

南嶽大慧禅師の会に、ある僧と
ふ、如鏡鑄像、光帰何処。師云
大徳未出家時相貌、向甚麼処
去。僧曰、成後為甚麼不鑑照。

師云、雖不鑑照、瞞他一点也不

南嶽山大慧禅師、因僧問、如鏡
鑄像、光皈何処。師曰、大徳未
出家時相貌、向甚麼去。僧曰、
成後為甚不鑑照。師曰、雖不鑑
照、瞞他一点也不得。

照、瞞他一点也不得。

得。(一七八頁)

真字『正法眼蔵』中一六

金沢文庫本

仮字および真字の出典第一類は『統要集』卷三(四B)五
A)であり、合致している。仮字は真字或いは『統要集』か
ら引用したものである。

×似古鏡闊(古鏡)

雪峯、示衆云、世界闊一丈、古
鏡闊一丈、世界闊一尺、古鏡闊
一尺。時玄沙指火炉云、且道、
火炉闊多少。雪峯云、似古鏡
闊。玄沙云、老和尚、脚跟未点
地在。(一八四頁)

金沢文庫本

真字『正法眼蔵』中九

仮字の出典は不明であるが、『聯灯会要』卷二一(Z一三六
・四一〇A)B)が最も近い。真字は『統要集』と合致してい
る。仮字と真字は出典を異にしている。

○古鏡未磨時(古鏡)

「古鏡」卷の国泰弘瑠の古鏡の話(一八六頁)は、真字(中
一七則)及び『伝灯録』卷二一(T五一・三七三A)と合致し
ている。仮字は真字或いは『伝灯録』から引用したものと考
えられる。

×揚眉瞬目（有時）

「有時」卷の薬山と馬祖の揚眉瞬目の話（一九三頁）の出典第一類は『聯灯会要』卷一九（Z一三六・三六九D）である。真字（中五〇則）は、この仮字で引用された話の一部分を挙げているのみであるので、真字が仮字の出典になったとは考えられない。

○無縫塔（授記）

「授記」卷の雪峯と玄沙の無縫塔の話（一九六頁）は、真字（上六〇則）及び『統要集』卷九（二〇AとB）と合致している。つまり真字の出典第一類は『統要集』であり、仮字の出典は、真字或いは『統要集』である。

×月未円時（都機）

舒州投子山慈濟大師、因僧問、
月未円時如何。師云、吞却三箇
四箇。僧云、円後如何。師云、
吐却七箇八箇。（二〇七頁）

舒州投子山慈濟大師、嗣翠微 諱大同因
僧問、月未円時如何。師曰、吞
却兩箇三箇。僧曰、円後如何。
師曰、吐却七箇八箇。
真字『正法眼藏』上一三
真法寺本

仮字の出典第一類は『聯灯会要』卷二一（Z一三六・三八八

仮字『正法眼藏』と真字『正法眼藏』（角田）

D）、『禪門拈頌集』卷一八（K四六・二九六B）であり、真字および頌古の出典第一類は『伝灯録』卷一五（T五一・三一九C）である。ポイントとなるのは仮字の『吞却三箇四箇』の部分であり、真字は「兩箇三箇」（頌古は「兩三箇」としており、両者は違う出典からの引用と考えざるを得ない。

×香巖擊竹（溪声山色）

「溪声山色」卷の香巖智閑と滄山の因縁（二一六と二一七頁）は和文にて示されている。出典は不明である。出典の第二類としては、『聯灯会要』卷八（Z一三六・二八三BとC）『伝灯録』卷一一（T五一・二八三Cと二八四A）が挙げられる。真字（上一七則）の出典も不明である。頌古（一七九と一八〇）は真字を略してまとめたかたちであるが、仮字は真字によつたものではない。

×瑯琊清浄本然（溪声山色）

「溪声山色」卷の瑯琊慧覚の話（二二八頁）は問者を「教家の講師子璿とふ」としているが、真字（上六則）は「因僧問」としている。この点で、仮字の出典第一類は『普灯録』卷三（Z一三七・三八BとC）、真字の出典第一類は『宏智頌古』（T四八・二七B）と考えられる。

○靈雲桃華悟道(溪声山色)

「溪声山色」卷の靈雲桃華悟道の話(和文、二二七頁)は、真字(中五五則)或いは『大慧正法眼蔵』卷二(Z二一八・一八D)からの引用と思われる。真字と『大慧正法眼蔵』は合致している。

○長沙山河大地(溪声山色)

「溪声山色」にある長沙景岑の山河大地の話(和文、二二八頁)の出典は、短文でもあり和文でもあるので特定できないが、真字(上一六則)および頌古(二七五頁)の出典第一類は『宏智拈古』(T四八・三三A、B)、『圓悟拈古』(T四七・七九四B)であり、仮字は、真字或いはこれらから引用したものであると思われる。

○体得仏向上事(仏向上事)

「仏向上事」卷の洞山の体得仏向上事の話(二三四頁)は、真字(上一二則)および頌古(一七六、一七七頁)と合致している。出典の第一類は『伝燈録』卷一五(T五一・三三C)である。仮字は、真字或いは『伝燈録』から引用したものであろう。

△仏向上人(仏向上事)

高祖悟本大師、示衆云、須知有仏向上人。時有僧問、如何是仏向上人。大師云、非仏。雲門云、各不得、状不得、所以言非。保福云、仏非。法眼云、方便呼為仏。
洞山悟本大師曰、須知有仏向上事。僧問、如何是仏向上事、師曰、非仏。雲門曰、名不得、状不得、所以言非。
真字『正法眼蔵』上七二
真法寺本

仮字の出典は不明である。「仏向上人」とする出典群は『伝燈録』卷一五(T五一・三三C)、『宏智拈古』(T四八・三〇A)等であるが、「須知有仏向上人」のところが「知有仏向上人、方有語話分」(『伝燈録』)、「体得仏向上人、方有説話分」となっており、異なっている。

真字の出典第一類は『大慧正法眼蔵』卷一(Z二一八・六B)、『雲門録』中(T四七・五五八A)である。仮字が、真字或いはこれらから引用しているとすれば、道元禪師が「仏向上事」を「仏向上人」と誤って引用したことになるだろうか。いずれにしても不可解な引用文である。

○石頭不得不知(仏向上事)

「仏向上事」卷の石頭と天皇の話(二三八頁)の出典第一類は、真字(中九一則)および『伝燈録』卷一四(T五一・三〇〇)

九C)である。仮字は、真字或いは『伝灯録』から引用したものと考えられる。

○平常心是道(秘本・仏向上事)

又趙州真際大師、そのかみ南泉
に問、「いかにあらんかこれ道
にてある」と。南泉しめしてい
はく、「平常の心これ道なり」
と。
(二三五頁)

趙州観音院真際大師、問南泉、
如何是道、泉曰、平常心是道。
(以下、略)

真字『正法眼蔵』上一九
真法寺本

仮字のこの引用文は短文であり、出典は特定できない。真字の出典第一類は『統要集』巻四(一四A)である。

○見色見心(秘本・仏向上事)

「仏向上事」巻の長慶と保福の見色見心の話(和文、二三六頁)は真字(中九二則)および『伝灯録』巻一九(T五一・三五四C)と合致している。仮字は真字或いは『伝灯録』から引用したものであろう。

◎転大蔵経(看経)

趙州観音院真際大師、因有婆
子、施浄財請大師転大蔵経。師
下禅牀、遶一匝、向使者云、転
蔵已畢。使者廻拳似婆子。婆子
曰、比来請転一蔵、如何和尚只

趙州、因有婆子、施浄財請師転
大蔵経。師下禅牀、遶一匝曰、
転蔵已畢。人回拳似婆子。婆
曰、比来請転一蔵、如何和尚只

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』(角田)

曰、比来請転一蔵、如何和尚只
転半蔵。
(二二〇頁)

真字『正法眼蔵』上七四
真法寺本

真字の出典の第一類は『大慧語録』巻九(T四七・八四九B)であり、ほぼ合致しており、これがまた仮字の出典の第一類と考えられる。仮字の出典として両者を見た場合、真字の方がより近い。仮字が真字と異なる点は「財」を「浄財」としている点、「師」を大師としている点、「向使者」が加えられ「人」が「使者」となっている点であるが、(仮字と合致する他の出典が見出されていない現時点では)これらは、真字を基にして、この古則をわかりやすくするために付加したものと考えるとよいであろう。故に、仮字の出典は、直接的には真字であると考えられる。

○雪峯剃髮話(道得)

「道得」巻の雪峯剃髮の話(和文、三〇三〜三〇四頁)及び真字(中八三則)・頌古(一八一〜一八二頁)はほぼ合致している。これらの出典第一類は『大慧正法眼蔵』巻一(Z一一八・四B)である。仮字は真字或いは『大慧正法眼蔵』から引用したのであろう。

◎祖師西来意（仏教）

玄沙、因僧問、三乘十二分教即不要、如何是祖師西来意。師云、三乘十二分教總不要。

玄沙、因僧問、三乘十二分教即不要、如何是祖師西来意。師曰、三乘十二分教總不要。

（三〇九頁）

真字『正法眼蔵』上四五
真法寺本

仮字は真字から引用したものである。真字の出典は不明である。『伝灯録』卷二五（T五一・四一六C）には「僧拳人問玄沙曰、三乘十二分教即不問、如何是祖師西来意。玄沙曰、三乘十二分教不要」とあるが、「不要」を「不問」としている点で相違している。

◎神通（神通）

「神通」卷の瀧山と仰山・香巖の神通の話（三一五〜三一六頁、これでは略）は、話文で示されているが、真字（上六一則）とはほぼ一致している。この「神通」卷の引用文が、真字からの引用か、或いは真字の出典の第一類とされる『統要集』卷四（三〇B）からの引用か定かではないが、『統要集』では「師一日臥次」を、真字では「大瀧一日臥次」（「神通」卷では大瀧あるとき臥せるに）、前者では「仰使出去」を後者では「仰使出」（「神通」卷では「仰山すなはちいづるに」としている点

を考えると、真字からの直接引用かと見る方が妥当である。また、拈評本では「為我原夢看」（真法寺本、成高寺本および『統要集』では「為我原看」となっており、「神通」卷の「わがために原夢せよみん」に最も符合している点は興味深い。

△無寒暑（春秋）

洞山悟本大師、因僧問、寒暑到来、如何廻避。師云、何不向無寒暑処去。僧云、如何是无寒暑処。師云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨。

洞山悟本大師、因僧問、時節恁麼熱、向甚処回避。師曰、向熱不到処回避。僧曰、作麼生是寒熱不到処。師曰、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨。

（三二七頁）

真字『正法眼蔵』下二五
真法寺本

仮字の出典第一類は『宏智録』卷四（T四八・四六C、卷一にもある）である。真字と頌古へ七四（二八二頁）はほぼ合致しているが、出典は不明である。頌古は真字から引用したものであろうか。

◎二祖礼拝得髓（葛藤）

「葛藤」卷の二祖礼拝得髓の話（三三三頁）および真字（下一則）の出典第一類は『伝灯録』卷三（T五一・二一九B）である。仮字は、真字か『伝灯録』のいずれかから引用したも

のと考えられるが、真字と『伝灯録』を比較した場合、真字の方がより近い。

◎庭前柏樹子（柏樹子）

「柏樹子」巻の庭前柏樹子の話（三五〇頁）の出典第一類として、真字（中一九則）、『統要集』巻四、『聯灯会要』巻六（Z一三六・二六四C~D）があげられる。ただし、三者の唯一の相違点である「以境示人」の「以」の語に注目してみれば、「以」とするのは真字であり、『統要集』『聯灯会要』ともに「將」となっており、この点で真字のほうがより近いと言える。仮字はやはり真字からの引用ではないか。

△三界唯心（三界唯心）

「三界唯心」巻の玄沙と地藏の三界唯心の話（三五六頁）の出典第一類は『伝灯録』巻二一（T五一・三七一A）である。これは仮字が「桂琛亦喚作竹木」としている点が一致しているからであり、真字（中二二則）・『統要集』巻一〇（二〇A）・『聯灯会要』巻二六（Z一三六・四三〇D~四三二A）では「某甲亦喚作竹木」となっているからである。しかし「尽大地覓一箇会仏法人不可得」の部分は真字が一致しており、『伝灯録』は「会仏法人」が「会仏法底人」となっている（『統要集』も同じ）。仮字が何から引用したのかは定め難い。

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

ちなみに真字の出典第一類は『統要集』である。

◎説心説性（説心説性）

神山僧密禪師、与洞山悟本大師
行次、悟本大師、指傍院曰、裏
面有人説心説性。僧密師伯曰、
是誰。悟本大師曰、被師伯一
問、直得去死十分。僧密師伯
曰、説心説性底誰。悟本大師
曰、死中得活。（三五八頁）

潭州神仙僧密禪師嗣雲、与洞山
行次、山指傍院曰、裡面有人説
心説性。師曰、是誰。洞山曰、
被師伯一問、直得去死十分。師
曰、説心説性底誰。洞山曰、死
中得活。

真字『正法眼蔵』上六一

仮字の出典第一類は、真字、『統要集』巻七、『聯灯会要』巻二〇（Z一三六・三八四D）であるが、真字が最も合致している。『統要集』『聯灯会要』は「指傍院」が「指路傍院」となっており、『聯灯会要』はさらに「説心説性底」が「説心説性者」となっている。

○聞燕子声（諸法実相）

玄沙院宗一大師、参次、聞燕子
声云、深談実相、善説法要。下
座。尋後有僧請益曰、某甲不
会。師云、去、無人信汝。

玄沙因参次、聞燕子声、乃曰、
深談実相、善説法要。下座、尋
後有僧請益曰、某甲不会。師曰
去、無人信汝。

（三七四頁）

真字『正法眼蔵』下四一
真法寺本

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

二五六

仮字で、「善説法要」の「善」が乾坤院本では「普」となっているが、これは誤写と思われる。仮字の出典の第一類は、真字・『統要集』である。真字から引いたものか、『統要集』から引用したものかは定め難い。真字は「声」の下に「乃」があり、『統要集』は「下座」の上に「便」がある（『聯灯会要』も同じ）。

○滅却正法眼蔵（仏道）

「仏道」巻の臨済の滅却正法眼蔵の話（三八四）は真字（中六七則）および『宏智頌古』（T四八・一九C）と合致している。仮字は、真字或いは『宏智頌古』から引用したものである。

◎世尊密語（密語）

雲居山弘覚大師、因官人送供問曰、世尊有密語、迦葉不覆蔵。如何是世尊密語。大師召云、尚書。其人応諾。大師云、会麼。尚書曰、不会。大師云、汝若不会、世尊密語。汝若会、迦葉不覆蔵。

（三九二頁）

洪州雲居山弘覚禪師、嗣洞山 諱道膺因官人送供問曰、世尊有密語、迦葉不覆蔵。如何是世尊密語。師召曰、尚書。書応諾。師曰。会麼。曰、不会。師曰、汝若不会、世尊密語。汝若会、迦葉不覆蔵。

真字『正法眼蔵』上三四

真法寺本

この「密語」巻の引用も真字からの引用と思われる。真字と『伝灯録』巻一七（T五一・三三五C）は冒頭部分を除いて一致する（但し、「書応諾」を永昌院本と成高寺本では「其人応諾」としている点を考慮した場合）。『伝灯録』の冒頭は「荆南節度使成汭遣大将入山送供。問曰……」（『聯灯会要』巻二一（Z一三六・四〇〇A）もほぼ同じ）と、異なっており、この点で真字からの引用と見るのが、より妥当と考えられる。また仮字では、真字の問者・答者の略記・省略を補ったものと考えられる。

◎無情説法（無情説法）

「無情説法」巻の洞山と雲巖の無情説法の話（四〇〇頁）および真字（中四八則）の出典第一類は『伝灯録』巻一五（T五一・三二一C）である。但し、偈の部分を比較してみると次のようである。

也大奇、也大奇	也大奇、也大奇	也大奇、也大奇
無情説法不思議	無情説法不思議	無情説法不思議
若将耳聴終難会	若将耳听声不現	若将耳聴声不現
眼処聞声方得知	眼処聞声方得知	眼処聞声方得知
(仮字)	(真字金本)	(伝灯録)

「終難会」としているのは仮字のほか『永平広録』巻六（四五二上堂、一一七頁）であり、「声不現」としているのは、真

字・頌古(一七七頁)および『伝灯録』である。『伝灯録』はさらに「無情説法」を「無情解説」としている(東禅寺版も同じ)点で異なっており、真字は『伝灯録』から引用していると考えられるにしても、仮字の直接の出典は真字であるとするのが妥当であろう。

◎修証不染汚(洗淨・遍参・自証三昧)

六祖慧能と南嶽の修証不染汚の話は「洗淨」(四六六頁)、「遍参」(四八九頁)、「自証三昧」(五五二頁)等にある。出典第一類には『広灯録』巻八(Z二三五・三三五C)が挙げられるが、これは他の出典群と比較したときに最も近いからであるが、相違する点が少なくない。例えば、末尾の「乃至西天祖師亦如是」(「洗淨」巻)を『広灯録』は欠いている。(他の出典群も同様。ただし『続灯録』巻一(Z一三六・二四D)は「西天二十八祖亦如是」とある)。ほか、詳細に見たとき、真字(中一則)が仮字に最も近く、真字は頌古(一七九頁)とも合致している。

仮字および頌古は真字から引用したものと考えられる。

×十方簿伽梵(十方)

乾峯和尚、因僧問、十方簿伽山嗣洞趙州乾峯和尚、因僧問、十方簿伽梵、一路涅槃門。未審、路頭在方簿伽梵、一路涅槃門。未曰、

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』(角田)

什麼処。乾峯以拄杖画一画云、
在遮裏。 (四七八頁) 審、路頭在什麼処。師以主丈指曰、在遮裏。

真字『正法眼蔵』上三七
真法寺本

仮字の出典第一類は『宏智頌古』(T四八・二四A)、『統要集』巻八(二一A)である。真字の出典は不明である。

◎仏祖意句(家常)

「家常」巻の大陽と投子の仏祖意句の話(四九八頁)の出典第一類は『聯灯会要』巻二八(Z一三六・四五九A)である。真字(中四三則)とこの『聯灯会要』はほぼ合致するが、仮字の「早有三十棒分也」のところを『聯灯会要』では「早有二十棒分」としており、「早有三十棒分」とする真字(真法寺本、但し成高寺本は「早有二十棒分」)の方がやや仮字に近いと言えようか。

△三喫茶去(家常)

趙州真際大師、問新到僧曰、曾到此間否。僧曰、曾到。師曰、喫茶去。又問一僧、曾到此間否。僧曰、不曾到。師曰、喫茶去。院主問師、為甚曾到此間也。喫茶去、不曾到此間也喫茶去。

趙州有僧到、便問、曾到此間否、僧曰、曾到。師曰、喫茶去。又問一僧、曾到此間否、僧曰、不曾到。師曰、喫茶去、院主問、曾到且從、不曾到如何喫茶去、師乃喚院主、主応諾、師

仮字『正法眼蔵』と真字『正法眼蔵』（角田）

二五八

師召院主。主応諾。師曰、喫茶——喫茶去。
去。 (五〇〇頁) 真字『正法眼蔵』下三三
真法寺本

仮字、真字ともに出典は不明である。また、仮字と真字はやや相違している。出典第二類としては『禪門拈頌集』巻一（K四六・一七五A）・『宏智録』巻四（T四八・五〇C）・『聯灯会要』巻六（Z二三六・二六六A）・『続灯録』巻二八（Z一三六・一九〇A）が挙げられる。

◎枯木竜吟（竜吟）

「竜吟」巻の枯木竜吟の話（五二〇頁）の引用文の直接の出典はおそらく真字（上二八則）であろう。真字の出典の第一類は『統要集』巻五（一八B）である。『統要集』から引用したものとも考えられるが、『統要集』の冒頭は「師因僧問、如何是道……」となっており、その点で「香巖山襲燈大師、因僧問、如何是道……」とする真字の方がより近い。

×千尺懸崖（祖師西来意）

「祖師西来意」巻の千尺懸崖の話（五二二頁）と真字（下四三則）、頌古（一八五頁）の三者でかなり相違している。仮字の出典は不明であるが、真字は『統要集』であり、頌古は『伝灯録』巻二二（T五一・二八四B）である。

◎百丈野狐（大修行・深信因果）

百丈野狐の話は「大修行」巻（五四四頁）および「深信因果」巻（六七六頁）にある。「深信因果」巻の引用文と真字（中二則）は全く合致しており、「大修行」も二、三の些細な点を除いて合致している。真字の出典第一類は『統要集』巻三（二八A）であるが、仮字を中心に見て真字と『統要集』を比較した場合、真字の方が仮字により近い。

◎捉得虚空（虚空）

「虚空」巻の石鞏と西堂の虚空の話（五六二頁）は、真字（下四八則）および頌古（一七七頁）と、ほとんど一致している。これらの出典は不明であり、出典第二類として『伝灯録』（T五一・二四八B）と『聯灯会要』（Z一三六・二五五D）があげられるが、いずれもかなり異なっている。何か別な出典があるのか、或いは『伝灯録』十『聯灯会要』というかたちで引用されたのか不明である。いずれにしても、真字が先ず在って、仮字と頌古はこれによったものではないだろうか。

◎講什麼経（虚空）

「虚空」巻の青山と馬祖の話（五六三頁）の出典第一類は、真字（上四則）と『統要集』巻三（四三B）である。但し、

『統要集』は末尾の「更無消息」の語を欠いている。仮字は真字より引用したものと考えるのが妥当である。

◎仙陀婆（王素仙陀婆）

南泉一日見鄧隱峯來、遂指淨瓶
曰、淨瓶即境、瓶中有水。不得
動著境、与老僧將水來。峯遂將
瓶水、向南泉面前瀉。泉即休。

（五九五頁）

南泉一日見鄧隱峰來、遂指淨瓶
曰、淨瓶是境、瓶中有水。不得
動著境、与老僧將水來。峰遂將
瓶、向南泉面前瀉。南泉便休。

真字『正法眼藏』上六四

真法寺本

仮字は真字から引用したものである。真字の出典第一類は『聯灯会要』卷五（Z一三六・二五八D）で、

師到南泉。泉指淨瓶、問師、淨瓶是境、瓶中有水、不得動著境、与老僧將水來。師拈淨瓶、向南泉面前便瀉。泉休去。

とあるが、仮字を中心に見たときに、真字がより近いことは瞭然である。

×外道問仏（四馬）

「四馬」卷の外道問仏の話（七〇〇頁）の出典は不明であるが、第二類として『伝灯録』卷二七（T五一・四三四C）が挙げられる。真字（中七〇則）は仮字とやや相違しており、出典第一類は『統要集』卷一（一四B）である。この古則は、仮字は『伝灯録』により、真字は『統要集』によっている。

仮字『正法眼藏』と真字『正法眼藏』（角田）

◎丙丁童子話（『辨道話』）

『辨道話』の丙丁童子の話（和文、七四三頁）の出典第一類は『宏智録』卷一（T四八・三A）とされる。しかし、注意して見るならば、これは真字（中二三則）をもとに和文化したものであることがわかる。これについては野村瑞峯「金沢文庫本正法眼藏——第二十二則について——」（『金沢文庫研究』第一一七号、昭和四〇年一〇・十一月）を参照されたい。金沢文庫本の訓点が、『辨道話』におけるこの古則の和語化に展開していったことの国語学的研究がなされている。

さて、以上、仮字と真字に共通する古則、全六一則について考察してみたが、筆者の分析では、全六一則中、◎が二四、○が二一、△が八、×が八という結果となった。◎と○の区別、或いは△と×の区別において、見者によって多少数値の異同もあろうが、仮字の出典として真字が圧倒的優位をもつことが明らかになったと思う。というのは、○は真字が他の出典と同等の合致度をもっているものであるが、その場合、真字が出典となった可能性が最も高いと考えてもよいと思われるからである。とすれば、全六一則中、四五則は真字から引用したことになり、真字が仮字撰述のための古則集として重要な存在であったことがわかるのである。

*本稿は、曹洞宗宗学研究所において、鏡島元隆所長の御指導のもと、粟谷良道・金子和弘・石島尚雄氏とともに、二年間余にわたって行った道元禅師の引用経典語録の出典研究ゼミの成果によるところが大きい。この出典研究ゼミでは、出典群の該当本文を一覧できる資料を作成し、綿密な比較検討を行ったが、いずれその成果は公にされると思う。このような地道な研究によってこそ、新たな宗学研究の進展があるのであろう。また、同所より最近刊行された真字『正法眼蔵』索引も大いに活用させていただいた。宗学研究所ならではの、今後の更なる研究成果を期待するものである。